



人文学的研究の新たな試みとしてのアスベストマンガプロジェクト : リサーチ方法の反省とプロジェクトの参加経験から

八幡, さくら

(Citation)

愛知 : $\phi \iota \lambda o \sigma o \phi \iota \alpha$, 32:59-76

(Issue Date)

2022-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81013381>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013381>



人文学的研究の新たな試みとしての

アスベストマンガプロジェクト

ーリサーチ方法の反省とプロジェクトの参加経験から

八幡 さくら

1. はじめに

近年様々な大学で教育改革が行われ、大学での学びのあり方や地域社会における役割が問われている。こうした現状において大学あるいは学問と社会を繋ぐ役割を担う一つのモデルになりうるのが人文学とりわけ哲学である。哲学は古来人間の思考力を鍛え、問いを求め、それに答え続けてきた知の営みである。近年哲学に対する市民の関心が高まり、哲学カフェや哲学対話という形で哲学は広く学校や社会でも受け入れられるようになってきた^①。このような状況を鑑みても、哲学は学問の世界に留まらず、社会と繋がるためのきっかけとなる可能性を持ち、そうした可能性を発揮する知的活動として広くひらかれることが市民や社会の側から求められていると言える。

本稿では、哲学が社会と繋がり、地域や市民に対してある一定の役割を果たした一事例として「アスベストマンガプロジェクト」を取り上げる。本プロジェクトは神戸大学大学院人文学研究科の「倫理創成プロジェクト」の一環で始められ、京都精華大学マンガ研究科との共同プロジェクトとして展開され、2012年に刊行されたマンガ『石の綿：マンガで読むアスベスト問題』を含む計3冊のアスベストマンガを制作してきた^②。そのプロジェクトの目的はアスベスト問題の実態をマンガという媒体を通して広く社会に伝えることにある。筆者は本プロジェクトを主導してきた松田毅教授のもと、神戸大学の学部生時代から大学院博士後期課程にかけてプロジェクトに参加し、大学院修了後も折に触れて関わってきた。本プロジェクトはアスベスト問題をマンガという形で表現・伝達した点で、目に見える形での成果を挙げたと言える。この成果に至るまでには、調査方法の模索や被害者家族との関係構築など、様々な試行錯誤

誤が行われてきた。例えば、深刻なアスベスト関連疾患に苦しむ被害者とその家族からの聞き取りをどのように受け止め、整理するかという問題もその一つである。

そして、このプロジェクトは両大学の教員によって主導され、学生・大学院生・OBらの共同作業によって可能になったものであり、教育プログラムという側面を持つ。本プロジェクトがその遂行過程で生じてきた困難をいかに解決してきたのかを振り返ることは、将来の哲学研究・教育のあり方を示す一つの参照軸となるはずである。以上の問題意識から、どのようにして哲学が大学や学域を越えて社会的問題を扱い、教員や学生がいかに社会と繋がることができたのかを、アスベストマンガプロジェクトを事例として検討する。

本稿では、まず本プロジェクトの経緯をまとめ、調査方法としてのアクション・リサーチと機能マンガの特徴を紹介する。次にアクション・リサーチの中で本プロジェクトに大きな役割を果たした聞き取り調査に注目し、筆者の経験を交えながら、被害者が「語る」とそれを「聴く」との関係性を考察する。最後に、社会問題をマンガとして描く場合に生じてくる葛藤と倫理的問題を、実際にプロジェクトに参加した筆者とマンガ家の視点から検証する。以上の議論から、大学および学問が社会と繋がる新しい試みとしてアスベストマンガプロジェクトを理解し、現代社会における人文学ならびに哲学の可能性を示す。

2. アスベストマンガプロジェクトの経緯

2-1. アスベスト調査の経緯—記録の集積と調査研究活動

アスベスト問題は 2005 年に兵庫県尼崎市で発覚した、産業機械や建築材料のメーカーとして知られるクボタで使用されていたアスベストによる健康被害が発覚した「クボタ・ショック」をきっかけに広く注目されるようになった。アスベストは非常に微細な物質で防火性・耐熱性などの特徴から様々な場面で使用されてきた。しかし、それが肺などの体内に入るとアスベストじん肺や中皮腫、肺がんなどの重い病気を引き起こす。様々な曝露状態や曝露から発症までの潜伏期間の長さなどの問題に起因する因果関係の証明の困難さや補償制度の複雑さなどから、十分な補償やケアを受けられない人も多い。こうしたアスベスト問題についてその翌年から神戸大学人文学研究科では哲学専修の教授松田毅を中心に、被害者家族や支援団体、様々な専門家と協力して研究会の開催やインタビュー活動を進めてきた⁶⁾。2007 年に神戸大学人文学研究

科の倫理創成プロジェクトの一環としてアスベスト問題に関する研究が位置づけられ、学部生向けの授業 ESD コースと大学院生向け倫理創成論演習の中で関係者への聞き取りと被害地域の調査を行ってきた⁽⁴⁾。

アスベストマンガプロジェクトは、こうしたアスベストに関する調査によって資料が蓄積され、問題が整理される中で立ち上げられた。松田（2012）は、アスベストリスクが多様な曝露様態や深刻な疾患、複雑な補償制度などの様々な専門的内容を含むため、「一般市民や若い世代に理解していただくためには、研究結果を学会発表や雑誌論文等で公表するだけでなく、内容をより近づきやすいものにするための表現上の工夫が不可欠である」と考え、その一つの取り組みとしてストーリーマンガを広い意味の「リスクコミュニケーション」に役立てることを期待した⁽⁵⁾。松田は、マンガという媒体によって「アスベスト被害の歴史と現状を広く日本社会と世界に伝達し、歴史の事実と教訓として後世に継承する」だけでなく、震災がれきからのアスベスト曝露のような今後も課題として残る「アスベストによる健康被害を防止するための環境教育、啓蒙活動に活用できる」と考え、京都精華大学マンガ研究科と共同でアスベストマンガを作るに至ったとプロジェクトの経緯をまとめる⁽⁶⁾。

本プロジェクトの大きな特徴の一つは、被害者家族や地域住民、医療や法律など様々な領域の専門家と協力して大学教員と大学生・大学院生が協働で調査研究活動を行ってきた点にある。これが可能だった背景には、神戸大学がアスベスト被害の大きい尼崎や泉南を含む関西地域にあったことが大きい。そのため、このプロジェクトは神戸地区に住む・働く・学ぶ一市民として、すなわち共同体の一員としての、大学と地域連携活動の一環でもある。松田は、こうした一つの大学や専門分野の枠を超えて多様な人々と取り組む共同プロジェクトを人文学分野の視点から、「人文学の教育研究活動に関して独自の社会的説明責任を果たすことができる、新しいスタイルの活動、ひとつの実験」として捉え、アスベスト問題のような「具体的に深刻な社会問題に対する、国際的かつ学際的な共同研究の一掃結」かつ「地域の方々との連携活動からの発展型」と位置付けている⁽⁷⁾。

2-2. アスベストマンガプロジェクトの特徴①—アクション・リサーチの手法

アスベストマンガプロジェクトでは神戸大学と京都精華大学とが共同でアスベスト問題とマンガに関する授業を実施したほか、被害者や関係者からの聞き取り調査と

被害地域の現地調査を行った。この調査研究方法は社会学の「アクション・リサーチ」の手法に倣ったものである。松田（2011）は応用哲学の一つの方法としてアスベスト問題に関するアクション・リサーチの実践を以下のようにまとめる。

それは一言で言えば、研究者が社会の現場で当事者に働きかけることを本領とする。アクション・リサーチと伝統的フィールドワークの異なる点は、後者は客観性を理由に観察に徹することを研究者に命じる一方、前者は研究者もプレイヤーになるよう要求する点である⁹⁾。

前者においては、研究者は当事者や関係者と協力して当事者により近い立場から当該の問題について深く調査を進めることができるが、その分、当事者側の視点に偏りやすくなるという可能性がある。それゆえ、こうした姿勢が研究の「中立性」を欠くのではないかという批判が考えられるが、それに対して、松田は「安全」の問題に限って言えば、研究の目的自体が規範的に安全志向と危険回避を命じる以上、研究者が現実の、あるいは潜在する、被害者の視点に立つことを妨げるものは何もない」として、被害者の視点からアスベスト問題を研究することの意義を述べる⁹⁾。

アスベストによる健康被害の問題が「その学際的広がり」と倫理的深みとによって、応用哲学としての科学哲学や倫理学に変容を迫るもの」であり、アクション・リサーチの手法がアスベスト問題の例に即して、「リスクの評価、管理、コミュニケーションの各領域において実際に社会的にも貢献できる」と松田は述べ、その概略を以下の二点にまとめる¹⁰⁾。一点目は、被害者とその支援の市民団体や専門家と共同の学際的研究交流の場を設定し、統計的解析や地理情報のマッピングによるマクロで三人称的なリスク研究と、インタビューによる個人や集団の一人称的視点とナラティブに焦点を当てたミクロなリスク研究との統合を図る共同研究、およびその過程でのリスク論自体の方法論的反省を行うことである。二点目は、被害者や関係者の聞き取りと事例分析による工学・環境倫理の「臨牀的」研究を行うことと、二次被害予防の観点から関係者と協力してリスクコミュニケーションの一翼を担うことである。松田によれば、このような共同作業の中にアクション・リサーチによるリスク論構築の基盤が置かれる。ここから、アクション・リサーチという手法自体が必然的に研究者を「他者」と関わらせるものであり、その共同研究を実践する哲学者は異なる領域や視点、立場を媒介する存在になるべきだとわかる。

2.3. アスベストマンガプロジェクトの特徴②—機能マンガの実践

アスベストマンガプロジェクトは、神戸大学の松田が京都精華大学を訪れ、当時同大学教授だった竹宮恵子に、様々な将来的リスクを孕むアスベスト問題についてこれまでプロジェクトで収集してきた調査資料を、「マンガという表現手段で平易に社会へ広報・伝達することを希望した」という依頼から始まる⁽¹¹⁾。長年マンガ家として活躍してきた竹宮は、当時新しいマンガの可能性をひらくものとして「機能マンガ」というものを考えていた。竹宮によれば、すでに歴史マンガや教育マンガ、社史の紹介、道具や医療法の説明などに使用される「実用マンガ」というジャンルが確立されているが、研究や学問領域において専門知識をマンガ化するためには新しい考えが必要になる。そのため、「単なる仕事以上の注意を払いつつ、使命感を持って描くべき内容に責任を持つ社会性実用マンガ (Sociability practice Manga)」の創造が必要であり、このマンガの制作には、「実作者が研究・学問領域の専門家と対等に協議し、求められる内容をマンガに置き換えるために、妥協のない努力と熱心さを要求される」⁽¹²⁾。このマンガの実作者はマンガという道具の強い影響力と伝達力を正しく理解し、その力を最大限利用して、「誇張にはならないまでも、十分に強い印象を残す作品を作らねばならない」⁽¹³⁾。さらに、こうしたマンガ制作を可能にするためには、「社会性実用マンガの社会的な役割を十分に理解し、必要最低限ではなく必要十分な知識と資料を自ら求め、時には専門家をも動かしてその充実を図ること」、つまり「ひとつの技術として実作に向かう態度を決定して要求する」ことが必要になる⁽¹⁴⁾。このような実作者の「態度」を技術として構築するために必要な教育を竹宮は「機能マンガ」と名づける。つまり、機能マンガとはマンガの機能を「基礎的・古典的部分から学」ぶことによって、マンガの言語的理解を可能にするという「教育」であり、単なる実用マンガとは一線を画す新しいカテゴリーのマンガである⁽¹⁵⁾。

こうした機能マンガを実践する場となったのがアスベストマンガプロジェクトである。竹宮によれば、神戸大学側の依頼時点でプロットとしてまとめられた文章と章立てができていたが⁽¹⁶⁾、これをアスベストのことをほとんど知らないマンガ研究科生がマンガにするには多大な努力と調査が必要になる。例えば、取材や資料の読解、専門資料をマンガ化する努力と調査、表現の仕方などを教員が教える必要がある。インタビューによって被害者から聞いた言葉を、「リアルさを持ったマンガに変える」た

めには、クライアントと実作者側がともに、「最大限の時間と熱意」をかけなければならない⁽¹⁷⁾。そのためにプロジェクトのメンバーは互いの大学を行き来しつつ、精華大生は半年間アスベスト問題に関するレクチャーを受け、神戸大生は精華大生とストーリーの検討や表現の可能性、ページ数を検討する部会会議を持った。竹宮は、メンバー同士が自ら調査・情報収集し、議論し合うという共同作業を経ることによって、アスベスト問題を深く理解するようになり、それとともにメンバーたちがアスベストマンガの制作への「使命感」、すなわち、アスベスト問題のように複雑で深刻な問題を今こそ社会に伝えることの意義を感じるようになっていったと述べる⁽¹⁸⁾。以上の振り返りから、アスベストマンガプロジェクトは制作者のマンガ制作に対する意識変革を訴え、その職業倫理観を問い、マンガの可能性を広げる取り組みであったと言える。

3. 聞き取り調査の意義とその課題

3-1. 語ることと聴くこと

アスベストマンガプロジェクトの特徴として、被害者および関係者からの聞き取りがある。この聞き取りはプロジェクトの参加メンバーによって、また大学の授業の一貫として行われた。アスベスト被害の実態はマクロな視点で量化できるものだけではなく、因果関係や各々の被害者の特性に応じた個別事例についての質的研究が必要である。アスベストに曝露した時期や場所を特定するための書類や写真などの記録が残っていない場合も多いため、被害者や関係者に聞き取りを行い、その声を記録する。こうした聞き取りによって、被害者の記憶の中にあるアスベストとの接触の時期や場所、曝露時にアスベストの危険性を認識していたかなどを検証することができる。

聞き取りでは被害者による「語り」が非常に重要になってくるが、「語る」ということには常に「聴く」ということが付随している。一般的に私たちは語ることによって記憶を明確化し、自身の考えをまとめることができる。それが自分一人の語りではなく、特定の誰かに対して行われる場合、つまり聴き手がいる場合、語りは聴き手との相互作用の中で行われる。そのため、聴き手にもそれ相応の対応や聴き方が求められるし、アスベスト問題のように重い疾患や深刻な被害状況について当事者が語るためには、より慎重な対応が必要である。授業の場合、アクション・リサーチや聞き取り調査の前には事前学習として、アスベスト被害に関する基本情報や当該地域につい

て学び、グループや個人の問題意識を確認した上で、当日の聞き取りに参加する⁽¹⁹⁾。アスベスト問題に関する聞き取り調査の場合、被害者の生の声を通して彼／彼女らの記憶に即した被害歴や現状について聴くことを目的としているため、聴き手側は相槌を打つ、当事者が語った内容について確認する、あるいは、より詳細が知りたいと思ったことなどを質問するという形を取り、基本的に被害者の語りを聴くことに集中した。こうした当事者が語ることとそれを聴くこととの関係は臨床哲学や公害問題などでしばしば議論の俎上に載せられてきたが、アスベスト問題の聞き取りの特徴はどこにあるのだろうか？

松田（2008）は「環境正義の視点からリスクの語りを捉えることが、人文学の有効な方法となりうる」と考えている⁽²⁰⁾。「被害当事者や関係者の語り」を「リスク評価の専門家と製造業者の戦略と同時に社会リスク論の学際的研究の円環の中に位置づけ、リスクの「事実と価値」に関するパースペクティヴィズムの問題として考察するとき、それは環境リスクの「臨牀的」研究の認識的にも倫理的にも重要な基盤となる」と松田は述べ、アスベストリスクの場合それが顕著であると指摘する⁽²¹⁾。

この意味で、「語り」に関する第一の重要な点は、その出会いと対話が研究する者に教育的ないし人格的影響を与える可能性にある。聞き手は（肉体的にも精神的にも苦痛を受けている）被害者の語りを聴くために、当事者のもとに出向き、そこで自らの人間性を試される（と感じる）からである。当事者とその肉声に触れることで、聞き手は認識的にも倫理的にも拘束されうる。それが責任感を芽生えさせる根源であり、そのような対面関係の経験がリスク認識に実感をもたらす——これはある意味では「被害者の戦略」とも言えるが、他方では語る側にも、経験の反省、言語化や社会化の心理的効果など、語ることには多くの積極的意味がある。⁽²²⁾

被害の当事者やその家族にとって、病気の現状や身近な存在の喪失を語ることは肉体的かつ精神的に非常に大きな負担である。筆者が参加した患者と家族の会での聞き取りの際には、アスベスト疾患で喪った家族のことをまだ語ることができない被害者家族が泣き崩れるという場面もあった。このようにアスベストに関する被害や記憶が他人に語ることができない、言語化できないトラウマとして当事者やその家族に残っていることもある⁽²³⁾。こうした状況に遭遇した場合、聞き取りの現場は一気に緊張感を

増し、語る側だけでなく聴く側の心理的負担も急増する。聴く側は苦しんでいる人を前に「自分が聴いてよかったのか?」「どうしたらいいの?」「何ができるのか?」と自問自答することになる。

3-2. 異なる知識の出会いと変容—熟議のプロセス

松田（2008）はこうしたアスベスト被害についての聞き取りに続くリスク討議の過程を、リスクマネジメント研究の専門家として知られるオートウィン・レンの「熟議」の議論と結びつけて論じている。レンは被害者の語る「逸話的知識」（anecdotal knowledge）がリスク論上で重要性を持ちうることを指摘する。松田によれば、レンは「リスク管理の構成要素の一つとして、逸話的知識を、「対話を通じた熟議 deliberation」、言い換えれば「反省的考察」の中に位置づけて」おり、熟議では「素人市民の逸話的知識」と「専門家の提供する専門知識」という二つのタイプの知識が出会い、両者が互いに「学ぶ意志」を持つ場合、「相互に知識の有りに変化がもたらされうる」⁽²⁴⁾。通常専門家の専門知識がより高度で確実な知識とみなされがちだが、実際の生活や社会では、市民の知識すなわち「ローカル・ナレッジ」が専門家の気づかない視点や生活に根付いた知恵を提供する場合がある。異なる性質の二つの知識が提供され、それを議論の中で照合するとき、各々の知識はそれぞれの立場から見直される。

ただし、アスベストマンガプロジェクトの場合、聴き手は大学教員や学生であり、臨床心理士やその種の専門家ではない。また、アスベスト問題を研究している教員や大学院生以外は専門的知識を持つ専門家とは呼べない。こうした参加者による聞き取りは上述の「熟議」のプロセスに参加していると言えるのだろうか？松田（2008）は「アスベスト被害に遭われた方からの聴き取りは、逸話的知識を通じた学生や院生への教育的側面が強いが、それでも「熟議」の機能は果たしている」⁽²⁵⁾と述べ、大学生や大学院生もまた熟議のプロセスに参加する存在とみなしている。以上の議論を踏まえれば、専門家が被害者から学ぶという学習と、被害者家族が学ぶという学習、そしてそこに関わる学生の学びが、アスベストマンガプロジェクトでは共存していたと言える。学生は大抵の場合、教員や被害者家族よりも若い世代に属し、未来を担う存在である。被害者家族が自身の被害体験を語るのは自分達の記憶や知識をより合理的なものにしていくという学習のためだけではなく、聴き手側やまだ問題を知らない人に被害の現状を知ってもらい、さらなる被害を防ぐためであり、また同様の社会問題へ

の関心を高めるためでもある。中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会で中心的な役割を果たしてきた古川和子は、患者と家族の会が行ってきた、被害者の「声に耳を傾け、集めて発信するという地道な活動こそが未来へと継承されてゆか」ねばならず、「アスベスト被害者の声を未来への警鐘（継承）とする」ことを提唱している⁽²⁶⁾。未来世代を担う大学生や大学院生が被害者の声を聴くことで、これから起こりうるさらなるアスベスト被害やそれに類似する社会問題に対して敏感に反応し、対応するための意識や態度を育てていくことが目指されている。

4. マンガとして社会問題を描くこと—マンガ制作における葛藤とその倫理的問題

4-1. 哲学者の役割—プロジェクト参加者としての経験から

聞き取りで被害者の語りを聴き、現地調査で現場を体験する。こうした経験を積み重ねて生まれたのがアスベストマンガプロジェクトの構想である。しかし、それをマンガとして表現する場合、制作者によってアスベスト問題がもう一度語られる必要がある。実際に被害者の生の声を聴いてきたプロジェクトメンバーたちはいかにしてその声を作品に反映し、アスベスト問題とそのリスクを広く社会に伝えることができたのだろうか？

神戸大学側では様々な曝露様態と被害実態を伝えるため、ストーリーマンガとして異なる場所・登場人物を想定し、様々な性格の違う事例を取り上げ、多様なアスベストの被害実態とその問題を一冊のマンガとして描き出すことを目指し、九編のプロットを制作した。筆者が担当した「泉南」の章では、当時のアスベスト工場や街の様子を示す資料の不足と、聞き取り調査から浮かび上がった多様な被害実態という二つの課題があった。大阪府泉南地域は約100年にわたって石綿産業に携わってきた歴史があり、小さな石綿工場が集まった「石綿村」と呼ばれる地域があった。しかし時代とともに石綿産業が衰退し、現在ではその面影はほとんど発見できない。こうした零細企業がもはや存在しない泉南地域では、アスベストによる被害者たちが市民の会を設立し、石綿の使用を禁止しなかった国に対して集団訴訟を起こすに至った。「泉南」ではこうした歴史的経緯を事実としてマンガの筋に取り入れるとともに、架空の主人公たち（田中一家）がアスベストに曝露し、長い年月をかけて発症し、一家が苦しめられていく物語を描いた。

八幡（2020）はアスベストマンガプロジェクトを振り返って「泉南」の中の二場面

を分析した上で、「アスベストマンガはアクションリサーチを通した総合的な記憶の編み上げによる事実への接近を目指している」と述べ、マンガの持つ可能性と危険性について、前者を「人の記憶を呼び起こす」作用、後者を「人の記憶を書き換える」作用であると指摘する⁽²⁷⁾。マンガはその様々な機能、すなわち絵やストーリー、コマ割りやカットによる勢いや流れによって、読み手の感情を刺激し、より強いイメージを植えつける。このようにマンガが「被害者たちの曖昧な記憶を鮮明な絵として描き出すことによって、忘れかけていた部分まで思い出させることができる」一方、「覚えていなかったことをも当然覚えていたかのように記憶を改変する危険性」があり、さらに読者に「固定されたイメージや記憶を植え付ける危険性」もある⁽²⁸⁾。こうした危険性を回避できたのは、マンガを制作する各段階でのメンバーの注意深い態度と、メンバー以外にも語り手と他の被害者および関係者による内容の相互チェックのプロセスがあったからであり、このプロセスを経ることで「特定の被害者の視点に極端に偏らない中立的な描写」が成立している⁽²⁹⁾。とはいえ、一人称視点で描かれるストーリーにおける取捨選択は制作チームに任されていたことから、「地域史やその印象を変えてしまうかもしれない非常に重い責務」を感じ、プロジェクトの使命と倫理的責任を痛感する様子が見て取れる⁽³⁰⁾。

哲学の立場から歴史について研究する野家（2005）は記憶と記録の問題解決の糸口を与えてくれる⁽³¹⁾。野家によれば、過去の出来事や事実は客観的に実在するものではなく、「想起」を通じて解釈学的に再構成されたものであり、記憶は「物語行為」という「言語化」を離れて存在しえず、個人に留まらず他者と「共同化」され、断片的な出来事を因果関係によって繋ぐという「構造化」されるという行為を含む⁽³²⁾。このように想起を通じて解釈学的に再構成される物語としての歴史は、他の歴史叙述との整合性によって変更や修正が行われるため、「未完結」で「改訂を免れない」ものもある⁽³³⁾。そこから八幡は、アスベスト被害の歴史は聞き取りによって被害者が語ることを通して再構成し、言語化してきた「物語としての歴史」であり、個人の主観的な語りの他者との共有可能性を見出す⁽³⁴⁾。さらに八幡は、被害者の語る「物語としての歴史」を他の事実や事柄、そして他者の記憶といった「調査結果全体に照らし合わせて整合的であるかを我々が判断し、マンガ『石の綿』へ組み込んだ」と述べ、「このマンガもまたひとつの歴史叙述として将来的に検証される対象となる」可能性を示唆する⁽³⁵⁾。

松田（2008）によれば、哲学は「広範な科学的知識を視野にリスク論の科学哲学と倫理学の結節点を見据え、問題解決への提案を行うこと」を課題とし、人文学の研究者の役割は「リスクの語りと熟議との間を行き来する「媒介者」となることにある⁽³⁶⁾。アスベストマンガプロジェクトにおいてこの「媒介者」は具体的に何を媒介するのか？言い換えれば、一人称視点で語られる多様な記憶の物語を収集し、それらを繋ぎ合わせて歴史を再構成するとき、哲学者が担う役割は何か？それは各々の視点から少しずつ異なる場面を、多くの人が賛同しうる整合性のとれたものにし、誇張表現にならず冷静に情報を伝達できているかを判断することである。この判断を適切に行うためには、被害者や関係者、NPOなどの市民団体、医療や法律の専門家など、異なる立場の人々とともに問題点を発見し、互いに了解可能な地点を見つけるために議論する必要がある。こうした適切な判断を行い、そのために必要な道筋を整理し、話し合いを進める役割が「媒介者」に求められる。

4.2. マンガ家の役割—プロジェクト参加者としての経験から

京都精華大学マンガ研究科出身のマンガ家で同プロジェクトに参加した榎朗兆は、マンガを実際に作画する側の視点からアスベストマンガプロジェクトを振り返っている。榎はこれまでに三作のアスベストマンガを制作しており⁽³⁷⁾、『石の綿』では「泉南」を担当し、八幡のシナリオをもとにマンガを制作している。

榎によれば、機能マンガは実用マンガと似ているが、後者にはクライアントの意向が強く影響するのに対し、前者には「公平性」という要素が鍵になる。

「機能マンガ」は社会問題を取り扱う場合が多く、発信者側の一方的な主張に偏らず、収集した情報を整理し、ニュートラルに伝え、世間一般で誤解されている情報を修正したり、読み手の考える機会を促したりすることを目的としている。そのため「機能マンガ」は、マンガ実作者の知見を広げたり、研究・調査に活用するなど、様々な機能を果たすことが可能となっている。⁽³⁸⁾

榎は、現在資料がほとんど残っていない石綿工場や労働者、街並みなどの様子について自身で調査し、「忠実とは言えないがその時点で可能な限りの泉南石綿村の再現をマンガ上で試み」ており、機能マンガにおいてこうした世界観を作り上げる作業は「伝

えるべき情報の精度と説得力を高めるためにも大変重要な作業」だと述べる⁽³⁹⁾。ここに情報の表現方法に対するマンガ家自身の注意深く慎重な態度が見て取れる。

「公平性」の確保が問題になったのは「泉南」のストーリーの最後の箇所である。制作開始時には、ストーリーの主人公である田中家の人々がアスベスト国家賠償請求集団訴訟裁判の原告団に加わり、裁判が始まる場面で話が終わっていたが、2011年の東日本大震災を同マンガの「震災とアスベスト」の章で取り上げることになり、「時事性を高めて、現在進行形の出来事であることを表すために、「泉南」でも裁判の進展を加筆することとなった」⁽⁴⁰⁾。この箇所は榎が実作者として原告や裁判などの取材を行ったが、その過程で原告の逝去などもあり、次第に精神的負担が大きくなったという。榎はその理由を、「機能マンガ」が社会問題を取り扱うケースが多いために、加害と被害の構図に向き合う必要が生まれ、またマンガという媒体がキャラクターの主観を伴う性質が強いために、実作者も読み手も視点が被害者寄りに傾いてしまうことから起きた」と考える⁽⁴¹⁾。榎は当時の自身の状況を振り返り、実作者は「客観的な視点で技法や演出を考えながら執筆する」が、取材中にアスベスト疾患に苦しむ人々の人生を「追体験」する形になったため、制作のめり込むほど「主観性」に支配されやすい状態となっていたと分析する⁽⁴²⁾。

こうした事情に加えて2011年8月に取材で訪れた大阪高裁判決での原告の全面敗訴、判決当日朝に原告が逝去したことが重なって「筆者は客観性を失った結果、加筆分のネームで「国や高裁をいかにもな悪役として、被害者の悲痛な声をはねつける悪い奴らだと、読み手を誘導するような演出をおこなっていた」という⁽⁴³⁾。それについて竹宮および関係者によるチェックで指摘され、榎はネームを修正することになった。最終的に公開された『石の綿』の裁判の場面では、原告団の発言や絵を組み込みながら裁判の経過が整理され、そこでの国と原告団の対応とがわかりやすく語られている⁽⁴⁴⁾。

榎は上述の経験を反省してその後二編のアスベストマンガを制作し、機能マンガとして社会問題を描く上で正確な情報伝達のために、「公平性」を維持しつつ「主観性」を担保するという難しさと向き合う必要性を主張する。榎によれば、機能マンガのように社会問題を描くものが被害者視点に偏り過ぎると、「描写の誇張や情報の切り取りをおこないかねず、それが問題となった際に被害者の主張や運動そのものの信用を失う恐れがある」⁽⁴⁵⁾。

「機能マンガ」において公平性は、情報を客観的に伝えることで感情に左右されない視点を提供できるものの、その視点が強すぎると読者に対しての訴求力が失われ、「主観性」は感情に訴えることで読者を引きつけることができる反面、主観が強くなりすぎると企業や経済といった広い社会的問題への視点を見失う危うさがある。⁽⁴⁶⁾

ストーリーマンガでは主人公の感情変化に対する読者の共感が内容理解への橋渡しになる。しかし、登場人物の心情面の過度な表現は感動的である一方、読者から事実性を疑われる危険がある。機能マンガは一種の創作でありながら、そこに正確な情報を盛り込み、社会問題の実態を描写する必要があるため、マンガ家に多大な労力と繊細な注意力を求める。

アスベストマンガプロジェクトには、被害者とその家族、市民団体、大学教員、マンガ家、学生など様々な立場の人々が参画していたことで、マンガの筋書きや構成、さらに細かい場面について多角的な視点から確認や議論が行えた。被害者の視点に偏りやすい問題だからこそ、主観性と客観性の間で公平性を保ち、そのバランスを取ろうと努力することが、マンガ家はもちろんプロジェクト参加者全員求められる。

5. 終わりに代えて—対話の可能性をつなぐ

以上の議論から、アクション・リサーチを用いたアスベストマンガプロジェクトが被害者ら市民と専門家や学術研究者、学生との双方向的な学びの場となっていたことが確認された。そうであるならば、そこから生まれたアスベストマンガも市民と研究者との対話の可能性をひらくものとなるはずである。こうした着想の実践例として、筆者が企画・運営したワークショップ「マンガと哲学の対話—アスベスト問題に対する人文学的研究の展開」を紹介することで本稿を閉じたい⁽⁴⁷⁾。本ワークショップは2016年9月3日東京大学で神戸大学人文学研究科倫理創成プロジェクトと京都精華大学機能マンガ研究プロジェクト、東京大学国際哲学研究センター（UTCP）のL3プロジェクト「Philosophy for Everyone（哲学をすべての人に）」との共催で開催された。当時筆者はUTCPの特任研究員として哲学対話の活動を行っていた。哲学対話とは、対話を通して立場や考え方の異なる人々が問題について「共に問い、考え、語り、聞く」という「体験」としての哲学の方法であり、他者とともに行う知の活動である⁽⁴⁸⁾。

アスベストマンガの制作過程もまた両大学のメンバー、被害者とその家族、関係者との対話の過程であった。哲学対話をアスベストマンガの研究会に取り入れることで、プロジェクトメンバーだけでなく、様々な立場の参加者とともにアスベストマンガの意義を問い、プロジェクトの反省と新しい人文学的研究の展望がひらけるのではないかという意図のもと本ワークショップは企画された。

当日会場にはマンガ『石の綿』の一部を拡大して展示し、参加した学生や一般市民がマンガを読めるようにした。会前半はアスベストマンガプロジェクトについてプロジェクトのメンバー（松田毅、竹宮恵子、濱田麻衣子、榎朗兆）と京都精華大学出身で四日市公害のマンガを描いた矢田恵梨子から報告が行われ、さらに中皮腫・じん肺・アスベストセンターの永倉冬史氏とアスベスト疾患の患者の方からアスベスト被害の報告があった。

会後半に報告者と参加者で哲学対話を行った。報告者と参加者はまず「機能マンガの活用法とは何か？」という問いを立て対話を始めた。参加者間で機能マンガの概念やその定義が問題になった。マンガがわかりやすいという点から社会問題や社史、自治体紹介などによく使用されるが、クライアントの要望に沿う制作が求められるため、偏りのない中立的な立場に立ちマンガを描くことは難しい。そもそも中立性や客観的な視点を持つということは、個々のマンガ家あるいは一人の人間の持つ倫理観にかかってくるという意見から、マンガ制作における倫理観についても話し合われた。

会終了後参加者からはマンガを通してアスベスト問題という非常に重いテーマについて冷静に距離を持って受け止められたという意見や、もっとマンガによって問題を周知してほしいという意見が聞かれた。さらに発表者からも参加者とアスベスト問題や機能マンガについてじっくり話すことができ、機能マンガの概念と定義について深く考察ができたという声が聞けた。哲学対話は様々な年齢や立場、職業の人々が対話を通して他人の考えを知り、自らの思考を深めていく。今回の対話は、機能マンガの可能性や大学と社会との連携について、プロジェクトメンバーの内からの視点のみならず、一般市民や学生などの外からの視点を通して考える機会になった。

アスベストマンガプロジェクトはアクション・リサーチと機能マンガを使って人文学的研究の新たな試みを呈示した。そこで制作されたマンガは様々な人々との対話の可能性をひらく媒体となっている。このようにアスベストマンガプロジェクトは、今後どのように人文学および哲学者が社会問題に取り組んでいくかについて一つの指

針を与えている。

註

- (1) 例えば、2015年に発足した「哲学プラクティス連絡会」では、日本各地で行われている対話という方法を用いた哲学的実践について会員同士が活動について報告し、相互交流する場を設けることによって、哲学的実践の発展を目指している。詳しくは哲学プラクティス連絡会のHPを参照。
- (2) 他二作は『マンガで読む震災とアスベスト』（2014）と『改訂新版 石の綿—終わらないアスベスト禍』（2018）。
- (3) 聞き取りの記録は神戸大学大学院人文学研究科の倫理創成プロジェクトHP内の「アスベスト問題に関連する研究成果や情報」で公開されている。
- (4) アスベスト問題に関する調査や授業内容とその経緯については以下を参照。松田 2012、pp.48–52。
- (5) 松田 2012、p.49。
- (6) 同掲箇所。
- (7) 松田 2012、p.50。
- (8) 松田 2011、p.51。
- (9) 同掲箇所。
- (10) 同掲箇所。以下の二つの特徴に関しては同書、pp.51–52参照。
- (11) 竹宮 2020、p.36。プロジェクトの経緯と機能マンガの特徴については竹宮 2020、pp.31–44。を参照。
- (12) 竹宮 2020、p.40。
- (13) 同掲箇所。
- (14) 竹宮 2020、pp.40–41。
- (15) 竹宮 2020、p.41。
- (16) これがのちに『石の綿：マンガで読むアスベスト問題』（2012）となる。
- (17) 竹宮 2020、p.37。
- (18) 同掲箇所。
- (19) 例えば、ESD 関連の演習での調査は事前授業・実地調査・事後授業の三段階で組み立てられている。事前授業では、教員からのアスベスト被害についての説明、関連文献の講読の他、KJ 法を用いたグループ討議や問題の整理などを行った。実地調査をとおして、参加者自身が自分の目で見て聞いて体験したことを、事後授業で振り返り、考察するということが行わ

れた。

- (20) 松田 2008、p.9.
- (21) 同掲箇所。
- (22) 松田 2008、pp.9–10.
- (23) 2010 年 6 月に倫理創成プロジェクトでは、精神医学の観点からトラウマを語ることと聴きとること、そこでの支援者の役割について研究している宮地尚子による講演会を開催し、被害当事者の声を聴くことについて話し合う場を設けた。講演内容は宮地 2011 に掲載されている。
- (24) 松田 2008、pp.11–12. より詳細な熟議のプロセスについては同論文の p.12 に詳しい。
- (25) 松田 2008、p.12.
- (26) 古川 2015、p.23.
- (27) 八幡 2020、p.318.
- (28) 八幡 2020、pp.318–319.
- (29) 八幡 2020、p.319.
- (30) 同掲箇所。
- (31) Cf. 八幡 2020、pp.320–321.
- (32) 野家 2005、pp.157–176.
- (33) 野家 2005、pp.176–182.
- (34) 八幡 2020、p.321
- (35) 同掲箇所。
- (36) 松田 2008、p.13.
- (37) 他二作は『マンガで読む震災とアスベスト』(2014) と「エタニットー史上最大のアスベスト訴訟」(『改訂新版・石の綿—終わらないアスベスト禍』、2018)。
- (38) 榎 2020、p.296.
- (39) 榎 2020、p.298.
- (40) 榎 2020、pp.299–230.
- (41) 榎 2020、p.300.
- (42) 同掲箇所。
- (43) 同掲箇所。
- (44) 松田・竹宮 2012、pp.180–188.
- (45) 榎 2020、p.306.
- (46) 同掲箇所。
- (47) 本ワークショップの内容については UTCP ウェブサイトの Blog 内の「【報告】マンガと哲学の対話—アスベスト問題に対する人文学的研究の展開」の①および②を参照。
- (48) 梶谷 2018、p.114. 哲学対話の実践方法は主導者によって多少異なるが、UTCP で行われる哲学対話の実践方法については以下に詳しい。梶谷 2018、pp.177–246.

参考文献

- 榎朗兆 2020 : 「機能マンガ作画における姿勢と制約—実作者の視点より」、前川修・奥村弘編『マンガ／漫画／MANGA—人文学の視点から—』神戸大学出版会、pp.295–307.
- 梶谷真司 2018 : 『考えるとはどういうことか—0 歳から 100 歳までの哲学入門』幻冬舎
- 竹宮恵子 2020 : 「マンガの捉え方」、前川修・奥村弘編『マンガ／漫画／MANGA—人文学の視点から—』神戸大学出版会、pp.31–44.
- 野家啓一 2005 : 『物語の哲学』岩波書店
- 古川和子 2015 : 「患者と家族が求めてきたこと—未来への警鐘（継承）を組織して」『労働の科学』労働科学研究所、70 巻 9 号、pp.20–23.
- 松田毅 2008 : 「環境リスクの倫理学序説：その方法論的考察」『21 世紀倫理創成研究』第 1 号、pp.1–18.
- 松田毅 2011 : 「リスクと安全の哲学—アスベストによる健康被害のアクション・リサーチから」、戸田山和久・出口康夫編『応用哲学を学ぶ人のために』世界思想社、pp.47–57.
- 松田毅 2012 : 「アスベスト被害に関するマンガ『石の綿』制作について」『21 世紀倫理創成研究』第 5 号、pp.48–54.
- 松田毅・竹宮恵子 2012 : 松田毅・竹宮恵子監修、神戸大学人文学研究科倫理創成プロジェクト・京都精華大学機能マンガ研究プロジェクト制作『石の綿：マンガで読むアスベスト問題』かもがわ出版
- 宮地尚子 2011 : 「トラウマを語ること/語らないことと支援者の役割」『21 世紀倫理創成研究』第 4 号、pp.2–33.
- 八幡さくら 2020 : 「アスベストマンガにおける記憶と記録の問題」、前川修・奥村弘編『マンガ／漫画／MANGA—人文学の視点から—』神戸大学出版会、pp.308–322.

参考ウェブサイト

神戸大学大学院人文学研究科「倫理創成プロジェクト」HP、「アスベスト問題に関連する研究成果や情報」<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/ethics/archive/research/asbestos.html>（最終閲覧日 2022 年 1 月 14 日）

哲学プラクティス連絡会 HP <http://philosophicalpractice.jp/>（最終閲覧日 2022 年 2 月 11 日）

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属「共生のための国際哲学研究センター」（UTCP）ウェブサイト Blog 記事

八幡さくら「【報告】マンガと哲学の対話—アスベスト問題に対する人文学的研究の展開①」<https://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/blog/2016/10/post-842/>（最終閲覧日 2022 年 1 月 18 日）

八幡さくら「【報告】マンガと哲学の対話—アスベスト問題に対する人文学的研究の展開②」<https://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/blog/2016/10/post-843/>（最終閲覧日 2022 年 1 月 18 日）

（東洋大学国際哲学研究センター客員研究員／ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ校客員研究員）